

「安珍清姫の鐘」について

～ その由来と詳細 ～

【鐘の由来】

紀州道成寺が文武天皇妃・宮子姫の奏上により、大宝元年（七〇一年）に建立されてから二三十年余りが経ったときのことです。

醍醐天皇の延長六年（九二八年）八月、奥州白河（福島県白河市）の「安珍」という修験者が熊野へ参詣する途中、紀州室の郡・真砂の庄司清次の館に一宿を求めました。そのとき、庄司の娘「清姫」が安珍に思いをよせて言い寄りました。安珍は「熊野参詣を済ませたら、もう一度立ち寄る」と約束しましたが、その約束を破り立寄りせずに帰途に就いてしまいました。

そのことを知った清姫は激怒して安珍の後を追いかけて、日高川にかかると清姫は蛇身となり、もの凄い形相で川を渡り、ついに道成寺の釣鐘に隠れた安珍を見つけます。清姫は、鐘をきりきりと巻くと、炎を吐き、三時あまりで鐘を真赤に焼き、安珍が黒焦となって死ぬのを見て、自らも日高川に身を投じてしまいました。

この後、正平十四年（一三五九年）三月十一日、源万寿丸の寄進で道成寺に二度目の鐘が完成した祝儀の席のこと。一人の白拍子が現れ、舞いつつ鐘に近づきました。すると、白拍子は蛇身に身を変え、鐘を引きずり降ろすと、その中に姿を消しました。僧達は「これぞ清姫の怨霊なり」と一心に祈念して、ようやく鐘は上がったのですが、せつかくの鐘も宿習の怨念のためか音が悪く、また近隣に悪病災厄などが相次いで起こった



ため山林に捨て去られました。

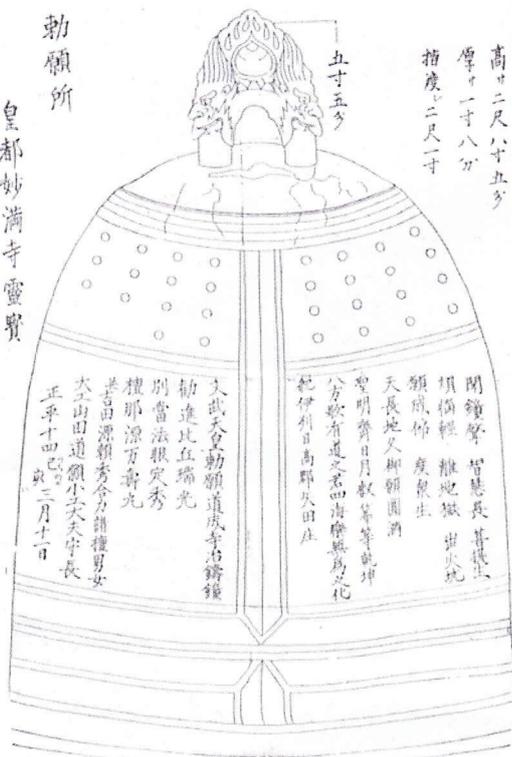
この話が後年脚色され、能楽や歌舞伎、長唄、舞踊など、古典芸能最高の舞曲のひとつ「道成寺物」として大成しました。

その後、二百年余りを経た天正年間、秀吉の根来攻め（一五八五年）の大將・仙石権兵衛秀久がこの鐘を拾って陣鐘（合戦の時に合図に使う鐘）として使い、そのまま京都に持ち帰りました。そして、安珍・清姫の怨念解脱のため、経力第一の法華経を頼って妙満寺に鐘を納めました。そして、時の貴首・日殷大僧正の読経により怨念は解かれ、鳴音美しい霊鐘となった。

この鐘は何度か開帳されていますが、現在でもこの妙満寺に安置されており。また、道成寺を演じる芸能関係の方々には、妙満寺に参詣してこの鐘に舞台の無事を祈ったそう。かつては市川雷蔵、若尾文子などが訪れたほか、現在も芸道成就を願う多方面の芸能関係者がお参りに訪れます。

【鐘の詳細】

高さ：約105cm
直径：約63cm
厚さ：5.3cm
重さ：約250kg



勅願所

皇都妙満寺靈寶